



工賃
月額三千円の人
が
月収一〇万円の
人になる

編集部=文
text by KOTONONE
岸本 剛=写真
photograph by Tsuyoshi Kishimoto

障害があっても
働き続けられる町に

取材の日の朝、芽室町役場の前で、「九神ファームめむろ」事業アドバイザー・且田久美さんと、一人の女性が話をしていた。「そう、がんばってね」と声をかけ、且田さんはこちらへ。「この間まで、うちの利用者だったんです。今年の四月から、町役場で働いているんだけど」。うちの仕事やりがいがありすぎたのか、町役場の仕事は、ちょっと拍子抜けみたい、と苦笑い。こうやって、「九神ファームめむろ」から「卒業」して、町で働く障害者が、これからどんどん増えていくのだから。「とにかく、子どもたちの顔が生き生きしている。この取り組みをやってよかったと思うのは、その顔を見ていくときです」と話すのは、芽室町長の宮西義憲さん。もともとは町の教育長も務めていた宮西さん。芽室町で子どもたちが生まれ育っていくことについて、課題を感じていたという。「義務教育を終えてしまうと、行政として手を差し伸べることのできる政策がないのです」。たとえば、不登校の子どもがいたとして、中学生の

北海道芽室町にある「九神ファームめむろ」。就労継続支援A型事業所として二〇一三年四月に事業開始した。芽室町ではじめてのA型は、全道で比較しても高い工賃を達成し、障害者が地域で働き続けることのできる場所をつくり上げたというだけでなく、「九神ファームめむろ」の卒業生たちが、町に出て働くことで、町の中に障害者を送り出す役割も担いつつある。



「九神ファームめむろ」工場の目の前に広がる畑で、じゃがいもを育てている

ときにどうにか不登校が解消したとしても、高校に入った後でもしっかりとした支えがないと、再び家庭に引きこもるようになってしまう。「社会人になった後でも、そういった子を支えることができたなら、普通に生きていくんじゃないか」。

宮西町長を動かしたのは「個性のまま生きて、なぜ悪いのか」という思いだ。「教育の現場で長い間いろいろと見てきました。不登校も、障害も、個性じゃないかと。個性のまま生きて、何が悪いのか」。

生きづらい人、障害のある人が、個性のまま、地域ですっと生きていくために、行政として考えなければいけないのは、「働く場」と「住む場」をしっかりと確保することだ。そうすれば、自立できる。宮西町長は、そう考えた。当時、芽室町には大きな社会福祉法人が一つあるだけ。そこには就労継続支援B型事業所はあったが、A型や特例子会社など、障害者が本格的に働くことのできる場所はなかった。「うちでも働く場をつくらう、障害のある人の就労を考えよう」と、動き出した。